知的対話の基礎としての「寛容」

フェリックス・ウンガー
寺西宏友　訳

まず，本日名誉学位記を賜りましたことに心よりの感謝を申し上げます。この栄誉は私にとって特別な喜びであるとともに，大いなる義務をも意味します。昨年来日をする前に，創立者池田先生の著作を詳細に拝読し，思索をさせていただきましたが，その際に，ある一つのことが明確になってまいりました。それは，我々は皆，世界的広がりでの対話に取り組み，違いを乗り越え，あるいはまた相互理解の基礎を達成しなければならないということであります。我々は，一つの地球という惑星の上に生きており，この地球のこれからの運命というのは，我々の対話遂行能力によって決められるのであります。後ほど詳しく申し上げますが，対話から一つの倫理的価値が生まれ，それに従って我々は行動しなければならないと考えております。それは，即ち「寛容」であります。我々がこのことを学ぶことが出来れば，平和を確かなものとする基礎が築けるのです。いずれにしましても，池田先生と我々の姿勢が共通するとの確信を持つことが出来，大変にうれしく思っております。それは即ち，異文化間そして宗教間の対話を共同して集中的に行っていくことを意味します。世界の中でこの地は，仏教によって，ヨーロッパはキリスト教によって特徴づけられています。池田先生の著作を学ばせていただいた限りでは，我々を隔てるのは言葉による表現と解釈のみであると思います。宗教間対話によって，様々な何世紀にもわたる伝統で培われた思考形態の間に橋を架け，新たなそしてグローバルな文化の為の新たな基礎を再び創出することが，使命であると思います。このことは，我がアカデミーの副会長であり，ローマクラブのリカルド・ディェス＝ホッホライトナー会長が常に，励まして言い続けていることでもあります。

ヨーロッパ科学芸術アカデミーは，1990年にケーニッヒ大司教，ロブコビッツ教授と私によって，人類にとって変化する学問の意味を考慮することを目的として，創立されました。

我々は，以前及びこれからの全ての世代を含めて，時の流れの中で，常に変化する世界に生きています。全ての変化が如何に速いかは，我々自身が身を持って知るところであります。今現在生きている，過去に生きた，またこれから生きる全ての人類が，人間としての道を自身の一生を生きることで，駆け抜けなければなりません。自己存在の本質からして，我々は存在（生きていることの意味）を把握せねばならず，存在の方向付けをしなければならず，最終的にはある種の存在の規定というところにたどり着かねばなりません。変化は永遠です。しかし，時代の画期から画期へと，全てを根底からとらえるような大きな転換が生じます。我々は今，そうした大転換を体験しています。それによって，全ての生命を新たに方向付けをするために問い直すことが必要なのです。こうした不断の新たな方向付けの作業に，未来への大いなるチャンスが存するのです。

ロベルト・ムシルが言うように，「全てが新たな物へと，煌めいている。」我々の道程において，自己の体験を通して，新たなる物を認識し，掌握し，そしてまた更に新たなる物への一里塚とすべく，眼と心を開いておかなければならないのです。こうした常なる転変をこそ，アカデミーは指し示さなければならないのです。全ヨーロッパに及ぶ1000名以上の会員と共に，我々はこの転変を考慮すべく努力しております。そして，ヘルムート・コール，スペイン国王，ヨルダン皇太子，ジャック・サンテール，アパード・ゲンツ，ヴァツラフ・ハベル，ヴィクトール・クリルナ等の多くの政治家によって，支持・庇護されています。1997年３月より，池田先生を本アカデミーにお迎えすることが出来ました。我々が考えたことを社会に伝えてもらう為に，こうした人々を必要とするのです。本日ここで，私は皆様に，本アカデミーの使命を３つの本質に関わる点にわたり，お話し申し上げようと思います。

この３点について始める前に，前提として確認したいことがございます。それは，全ての人間は，その存在を確かなものとするために肉体的に働く，また，

精神的にはその存在に方向付けを与えるということです。存在の為の克服と方向づけにおいて，人間はその人生に意味を与えることが出来るのです。労働の価値は，偏に生への意味付与において見出しうるのです。

皆様にアカデミーの本質をご理解いただくために，3点をかかげました。

1．科学（学問）とは何か

2．諸科学の関係性

3．科学の目的：世界像及びグローバルな基本的価値の形成の為

まず，第1点目について，科学をどう見るか：

この問いへの基本的なことは，すでに答えられています。科学の基礎は，人間の自然に対する関係性，人間同士の関係性及び精神的なものへの関係性の中で，集積された多くの体験であると，理解すべきです。人間の自然に対する関係性には，自然科学，技術科学及び環境科学が該当します。人間同士の関係性に於いては，語学，歴史学，社会学，経済学，政治学，心理学及び医学が該当します。精神的なものへの関係性では，哲学，芸術及び宗教が見出される。

これら3つの「人間の関係性」は，人間の肉体・精神的作用の別から，切り離して考えられてはならない。そうではなく，この3つが一体となった生き生きとした相互作用に於いてこそ理解されるべきである。従って，相互に連係し合う科学こそが，人間存在に対して意味を為すのであり，科学の相互作用においてはじめて，人間存在の実体の全体像が示されるのである。

以上のことからすでに，第2点目の科学の相互関係に対する答えが出てきます。科学は相互に，生命の全体像を織りあげることができるように，ネットワークを結び合わなければなりません。それが出来ない限り，マルティン・ハイデッガーの「学問は考えることをしていない」という非難は，厳しい現実でありつづけます。しかし，しばしば「科学」というタイトルの下に，人間存在に全く意味を為さないという意味での，精緻な無意味なる物が集積されることがあります。これは，ネットワーク化という視点をもたない「科学の官僚」によって行われます。

このように学際的な思考を修得することが，科学の緊急の課題の一つであります。それは，自身の経験全てを結び合わせなければならないというほどの意味である。科学は，結合・ネットワーク化においてはじめて，人間存在のために有用となるのである。科学における思索は，学際的に，まずは診断的に，つまり，人類にとっての欠陥と危険を見出し，そして臨床・治療的にあらゆる経験を駆使して欠陥の克服のためのコンセプトを提示します。そうしたことから，予後療法的に未来の構築の為のヴィジョンが生まれ出ます。ヴィジョンとシナリオは，生きていくために欠かすことのできないものです。それらは，我々と，将来再びヴィジョンを必要とするその子孫達に，意味と希望を与えます。それは，人生のバトンリレーのようなものであり，ヴィジョンによって未来に対する信頼が培われるのです。

相互に織りあげられた科学は，水平的には日常生活に供され，垂直的には共生に，そして時間的にはまさにガルディーニが「道が生命のまっただ中をいく」と述べたように，生を貫く道に役立つのです。時間が我々にとっては問題であり，ダンテの切迫した「もっと，時は短い」，池田・ペッチェイの呼びかけの「まだ遅くはない」，アカデミー創立者のケーニッヒ大司教と私の「我々には，未来がある」との言葉は未来に対する確信を強調している。その思索及び行為において人生が短すぎるということそれ自体が，我々の問題なのであります。それ故，常に直ちに，そしてきっぱりと行動に移すことが大事なのであります。例えば心臓外科医の私がいつもそうしているように。以上のような生命の要請から，科学は，学際的でなければならないのです。

人生，社会そしてグローバルに地球に対してどのような貢献を為すべきか，との問いかけが常に提起される。自身の人生に対する貢献が有用なものであれば，私の知識が他者にとっても役立ちうる可能性があるのです。従って思索とは，自身の知識を人生の方向付けのために他者に与えていくという，隣人愛あるいは，遠く離れた人への愛という倫理的価値の表現でもあります。この意味における科学は，モハメッドにおいては，ミサ（宗教的儀式）と見なされます。人間にとって有用な科学は全て，芸術でもあります。それは，ますます多くの科学が学際的な断面・観点を持ち寄り，最終的にほぼ球面に近い像をもたらす

ようにしなければならないという意味です。そうして，科学は人間にとって，芸術となるのです。芸術的医学，芸術的哲学，芸術的政治，絵画，作曲の芸術，芸術的対話，そして芸術的な信仰の伝導というではありませんか。芸術的科学は，人類存在への貢献をなし，そしてそれがまた次への道標となるのです。

全て簡単そうに聞こえるかも知れません。しかし，我々の今日的世界像の基礎ということになると，我々は，神に代わる科学の魔法に非常に強くとらわれていることを認めざるを得ません。人類は自身を超人間的存在へと，そして何事をも可能としうる信念を，科学の世界の新たな神の原理へと押し上げました。過去200年間に，数学的・合理的なるものに対する過大評価が起こって参りました。そしてそれは，他の学問分野への展望を塞ぎ，ゆがめてしまったのです。それは，我々に常軌を逸した世界像，即ち統制がきかず，異常なほど合理的・論理的なものに傾いてしまった世界像をもたらし，そこでは人間のもつ３つの関係性に於いて，人間同士のそして，精神的なものへの関係が損なわれています。実際のこの３つの関係に於いて，１つが過大評価されることはあっても，人間がその中心に位置することができるように，バランスが保たれなければなりません。歪められた世界像と同義語として，お金が過大評価されています。その程度は，かの銀行という大聖堂の中の，窓口という祭壇で我々の命が生け贄として捧げられる「金の子牛」以上のものがあります。

それについて，２つの例証を示したいと思います。大量失業を背負い込むために，日々数十億ドル相当の株式保有の名義書き換えが行われています。それは，１つのドラマです。何故かならば，まず第１にかつてミダス王が試みたように，お金を食べることはできませんし，また一方では何千人という人々の生存の意味が略奪され，従って必然的に，新たなヨーロッパにおける革命への基礎を据えているのです。それに比べれば，あの残酷なフランス革命ですら，楽しいダンスであったと言えます。私の専門である医学に於いて，統制の取れなくなっていることがあります。医学学校においては，人間は対象へと貶められています。そして哀れな患者は，患者の権利によって医療保険の対象とされねばならないのです。もし我々が，生命の始まりと終わりについて，掌握していると信じているならば，事態はもっと深刻です。そのことによって最終的には，

この素晴らしき厳粛な生命の転換点（死）を操作しうる様に，またシュペーマンの言葉を借りれば，「最終的に殺人の恨みを免れるために」，曖昧さのみが生み出されるのです。

我々は断固として，科学は神にとって代わるものではなく，それは不可能なことであると，認識すべきです。自然・人間同士・精神性からなるトライアングルにおいて，一方的に理性のみが強調されてきたことによって，この三者の関係が，全く変質してしまい，人間を中心にした調和からはずれてしまってきている。計測可能なものの他にも多くのことが，シェークスピアのいう「天と地の間に」，横たわっているということを，徐々に気づき始めています。人間にとっての多くの本質的なテーマ，例えば死とかセックスの問題が，過去に排除されたり，タブー化されてきた。こうした排除・タブーについて，シュニッツラー及びジーグムント・フロイトが，取り上げたのも故無しとは言えません。或いは最近，死をタブーとしているために，脳死の問題をどう取り扱うかが，如何に難しいことかが分かってきています。

しかし，３つの関係性における科学の偏向性を修正しようという，目に見える変化の兆候がヨーロッパにおこってきております。計測可能性或いは計測可能とすることに対して，ヴィトゲンシュタイン以来，抵抗が起こってきています。もし，精巧な細工物のような個別の知識に執着するならば，科学はそれによって自己再生をなし，しかし全く人間とは無縁のものとなってしまうのは，明らかです。

憶測上の人間超越から一種の宗教へと形式化された科学信仰は，人間とは無縁のものです。科学だけを信じる人は，原理主義者であり，時代の鼓動を誤って解釈している，またしようとしているのです。私は，人間の自然・人間同士・精神的なものへの関係性を調和させること，そのバランスにおいて存在の実体に肉薄することこそが，アカデミーの喫緊の課題であると断固申し上げたい。我々が思索することを学び，科学を学際的にネットワーク化することが，喫緊の絶対命令なのです。全体的脈絡の中から取り出された個別の科学は，至るところに点在する人類に対する支配に仕えるだけです。こうした態度で終始するならば，我々は衆愚政治あるいは悲惨な革命への種子を植えることになってし

まいます。

第三点目の「科学の目的：世界像及びグローバルな基本的価値の形成の為」について。

科学の目標に関する方向付けは，すでにお話し申し上げたように，科学を人類にとって有用なものとするということです。それぞれの時代時代にあって，世界像に結実するような，新たな文化の創出に永遠に貢献を為すことであります。ヨーロッパ史においては，様々な世界像がありました。例えばギリシャの宇宙観に基づく世界像，トマス・アクィナスの神秘主義的，デカルト以降の論理的，近代の理性的世界像等々。私は，新たな世界像を，生態学的・神秘的な，そしてグローバルな次元を持ったものと考えております。こうした世界像は，知性と知性の対話から生まれ，「グローバルな人類文化」をもたらします。今日それは，可憐な花のような存在ではありますが，あたかも荒れ狂う生命の大海を照らす屹立した灯台の如く，希望の輝きを強く放っております。本質的な前提条件は，第一に，最初の部分で申し上げたとおり，科学を認識すること，第二には，それを学際的に，第三には目的として全体的な脈絡の中へと至らしめることであります。

全ての世界像及び文化と同様に，新たなグローバルな文化は，人間の信仰をたもつ能力の上に築き上げられるということを，はっきりとさせておかねばなりません。宗教というのは，人様々に解釈することは出来ますが，全ての文化の源であります。ここでの意味は，密度の濃い宗教間対話を為していくということです。それはまた，逆に我々皆が他の文化・宗教と対峙しなければならないと言うことをも意味します。全ての宗教は，その核心において，天と地の創造者としてのある種の神をたてており，その神が，人類に人生を通じての目的としての救済を予定しているのです。

こうした対話の為に，ある新たな人生の徳を徹底して学ばなければなりません。即ち「寛容」ということです。それは，決して形式的な寛容，例えばヨゼフⅡ世の寛容詔勅のようなことではありません。今日問われている寛容とは，他者の違いを分析・理解し，自分自身と対峙させるという内容的に深いもので

なければなりません。それは，一方では多くの愛着と別れをつげねばならない，しかし，他方では大いなる豊かさをもたらすということです。対話を通しての出会いの中で，他者は自分を補完するものとなったり，新たな全的存在となるのです。対話は脈打ち，あたかも花火が，次から次へと大輪の花をリズミカルに生み出していくように，永遠の鼓動をもたらすのです。

しかし，こうした対話のポイントは何なのでしょうか？　対話の中に於いて，本質的な共同体的連帯感を明らかにすることです。宗教間対話に於いては，我々は皆同様な創造主としての神を想定していることが，直ちに明らかとなるでしょう。素晴らしい宗教の創始者は，人類に対して彼のメッセージを，人生における救済として，示すことに成功しました。そのことを通して，これらの言葉は永遠となるのです。ここで，聖ペテロが，キリストについて述べていることを引用したいと思います。「主よ，私は何処へ行くべきでしょうか？　汝は永遠なる生の言葉を覚知している。」（ヒンヅー教の）ヴィシュヌーが世界を三歩でわたったことも，ブッダが自己救済を求めて，大変な苦行を自身に課したということも，ほぼ同じ意味となるのです。

この宗教間対話を，例えば新訳聖書の中のローマ兵と２マイル同行したたとえ話をもって，説明することが出来るでしょう。最初の１マイルは義務感で，２マイル目からはディスカッションが始まる。

皆さん，全ての科学の目的について定義をする前に，簡単に「３」という言葉，我々は頻繁に使っておりますが，それについてお話をします。「３」というのは，二元主義の克服であり，「完全」を表現しています。二元主義というのは，簡単に見通すことが出来ます。「黒と白」「善と悪」「計測できるものとそうでないもの」「男と女」「明と暗」「昼と夜」等々に整理する事が出来ます。３つの要素の相互作用という意味の「３」においては，人間が中心に位置していれば，完全なる真理を示唆するようなある種の電界のような場が生じます。我々が知るところの三幅対の多く，キリスト教の三位一体論，仏教における「仮諦・空諦・中諦」の三諦論，「天上・地上・下界」という宇宙論的世界観，ダンテの「天国・地獄・煉獄」，ライプニッツの「過去・現在・未来」という時代順的，「子供・両親・祖父母」という世代論的捉え方等々，意味がないわけ

ではありません。

私たちは，3つの使命と課題を自らに課したいと思います。そして，3つの願いを掲げたいと思います。我々は，誕生，生そして死という決して長くはない道のりで，こうした3つの相互に緊張する関係性から，救済を期待しています。

今世紀を規定してきた3つの概念は，フランス革命では，それまでの「信仰・愛・希望」にかわるものとして，「自由・平等・博愛」と表現されました。フランス革命の3つのモットーは，疑いもなく，全世界に及ぶ民主主義の確立に貢献しました。そのシンボルが，自由の女神像です。この3つの概念の基礎をなすものとして，世俗化があり，しかしまた多元主義における際限のない自由の中で，価値の無価値化がありました。これらは，常に形式的な寛容と対をなし，輝ける自分自身へ至る道程が授けられてきました。輝ける多元主義においては，各自が自分の関心領域が犯されない限り，自らの欲するところをすることが出来ました。今日我々が気づくまで，こうした姿勢が，地球が人類によって止まるところなく，搾取され破壊されてきたという事実に疑いもなく大きく関与しています。

1984年世界人権憲章規約が，地球上の殆どの国民によって，署名されました。それは，人間に内在する尊厳，法による支配と社会的進歩について述べています。この人権憲章規約は，世界中いたるところ，ヨーロッパにおいても，しかしながらまた私の故国においても，犯されることのない最低限の許可（権利）を有するとなっています。

今日この人権憲章規約は，無規律な自由と形式的寛容という近代的思考の先駆的存在と見なされています。冒瀆された世界の様相を提示する世紀末に，内実を伴った寛容が求められているのです。我々は，世界を共有し，維持し得るために，人間の本質と取り組むべきなのであります。それは，1人の人間，その人自身から始まります。それは，新たな3つの規範が，啓発的にまた動機を与えるという意味で，人間の行動を規定していくことを意味します。

そこで，科学の目的は何か，という問いへの答えに至ります。それは，人間存在への貢献であり，人類共生の新たなモデルの開発であります。新たな3つ

の規範としての共生の主題として，グローバルな基本的価値観を提案したいと思います。

生命の基本的価値とは

1．人間の尊厳

2．人間（能力）の開発

3．人間の保護

であり，個別には，以下で述べます。

1．人間の尊厳について

多くの憲法，特にドイツ基本法は，人間の尊厳で始められている。池田先生のおっしゃる意味で申し上げますと，人に尊厳を与える人は，自らの尊厳と栄誉を得るということです。人権規約は，第1・2・3・4・5条で，博愛という意味で，こうしたテーマを扱っています。

2．人権規約第6—30条で，自由と平等という意味で挙げられている人類の共生という総体が，人間の開発ということに属します。重要なのは，個性・肉体・精神的質の向上に対する自由ということです。

3．人間の保護ということについて。これは，人権規約で触れていない，またその限りに於いて，開発という点では言及されない生命の価値の模索がなされなければなりません。ここにおいては，人間の行為が，その多くの徳という局面で，重点的に照射されなければなりません。保護というのは，グローバルに不可侵のものとして確立されるべき価値を基礎とした行動倫理を前提とします。例えば，人間の発展を制限することなく，人間の尊厳を要求するように。生命に関する基本法は，人間の，また同時に社会及び地球の保護のために，宗教間対話の中で築き上げられます。この対話は，グローバルな，宗教の違いを超えた基本的な価値をもたらすのです。そのグローバルに受け入れられた価値と徳は，不可侵でなければなりません。例としては，仏法の十界論及び（マタイ伝5—7）の山上の垂訓（十戒）は，人間を自分自身から守ることを目的としています。ガルディーニの言葉を借りれば，危機というのは，「偏に人間自身に由来する」のです。私は自分を守り，地球を守るということです。こうした保

護というのは，平和実現の基礎であります。平和というのは，偏に啓発的に目的意識を持った自分自身の内面，及び基本的価値という意味での環境との対峙によってのみ，確かなものとなるのです。

ニューヨークの自由の女神は，過ぎ去りゆく理性の時代の，またそこから帰結した人権のシンボルであります。基本的価値の三つの関係概念は，人類と地球のグローバルな問題解決に於いて，新たな希望及び平和の基礎をもたらすことが出来るのです。

ヨーロッパ科学芸術アカデミーは，ザルツブルグのウンタースベルクという山の麓に60Mの高さの寛容の碑の建設を目標として掲げました。この建設は，寛容の賞の授与，青少年の育成，宗教間対話における学術的議論の促進とともに進められます。またこの宗教間対話は，世界的に受け入れられるような新たな生命の基礎と，世界的に有効な生命の基本的価値を目指したものです。この記念碑はただ孤高を囲って立っているだけではなりません。そうではなく，我々世界の全ての人々の心によって支えられなければなりません。その輪の中へ，皆さんを是非お迎えしたいと思っております。我々は，皆様の努力を人類と地球の平和への貢献と見なしております。

私の話の最後に，私に頂いた名誉学位記を，宗教・文化を超えて架かる意義ある橋の支えと思っております。我々皆が一つになってこそ，グローバルな平和を確かなものとする事が出来るのです。私は寛容こそ，生命の基本的な価値を達成する媒体であると思っております。ご静聴有り難うございました。

※本稿は，1997年7月11日，ウンガー博士に対する創価大学名誉学位記授与の際に，行われた同博士の記念講演の全訳である。